



Title	M. Arnoldの批評の現代的意義
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外国語大学学報. 1973, 29, p. 261-270
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

M. Arnold の批評の現代的意義

上 山 政 義

The Significance of M. Arnold's Criticism in Our Time

The purpose of this essay is to think about the significance which Matthew Arnold's criticism has in these modern days, chiefly through his *Culture and Anarchy* and *Essays in Criticism*. Arnold is thought to be one of the most eminent critics in England. More than eighty years have passed since his death, so his criticism may have partly become stale or out of date. In fact, some of his opinions are criticized by T. S. Eliot and other critics now. His views and assertions, however, still contain not a few merits that attract our attention. In this essay those merits are pointed out one by one and their significances in our time are made as clear as possible.

Matthew Arnold (1822—88) の批評の機能に就いての所見、彼が抱く批評精神、及び彼の批評家としての諸論説が、現代において如何なる意義を有するかを研究することが、本稿の主たる目的である。彼の没後既に八十有余年を経過しているが、今日なお英国批評史に印した彼の足跡は燦然たる光輝を放っている。川田周雄氏は、現代英米批評文学に及ぼしている Arnold の影響力に関して次の如く述べておられる。「マシュー・アーノルドが英国批評文学の古典であることは、もはや動かぬところである。ワイルド、シモンズ、ペイターが、また米国のバビット、モア、シャーマン等が直接アーノルドの流れを汲み、その後者の一群の批評家、すなわち『ニュー・ヒューマニスト』を非難した T. S. エリオットもアーノルドとその後継者を批評することによって、これと深く結ばれているのである。いってみればアーノルドの著作は、現代の英米批評文壇の『思想の風土』の一要素と化し、個々の批評家は意識するとせぬとにかかわらず、なんらかの影響を受けているものといっても過言ではないのである。」⁽¹⁾ と。次いで、斎藤勇氏も批評家としての Arnold に就いて、「近代知識人の批評的精神を具現している。」⁽²⁾ と述べ、さらに「イギリスは『純英国式偏見』を脱ぎ棄てて、地中海沿岸から起った教養の大潮流に棹ささなければならないと説いたことは、彼が知的には国際的であったことを示すに十分である。」⁽³⁾ と記して、彼の業績を高く評価しておられる。然し、同氏は他方では「彼は自己の知的優越を意識し過ぎて、時として独断的であることを免れなかった。」⁽⁴⁾ と彼の欠点をも指摘しておられる。

ところで、Arnold の短所に関しては、現代英国に於ける最も傑出した批評家の一人であった T. S. Eliot は、Arnold の研究者としても著名であるが、彼の欠点を次の三つに要約している

と、D. Cahill 氏は記述している。⁽⁵⁾

1. Arnold was a propagandist and a moralist rather than a critic.
2. Arnold was an imprecise thinker with no gift for consistency of definition and without the power of connected reasoning at any length.
3. Arnold was completely wrong in thinking that poetry could become a substitute for religion.

Eliot が指摘した三つの欠点の中で、第3番目については正鵠を得たものと言うべきであろうが、第1、第2番目については、少々苛酷な批評ではないかと思われる。ただし、Arnold が moralist であったことは明白な事実であり、彼の批評の最も一般的な動機が倫理的なものであったことを、K. Allott 氏は下記の通り論述している。

The most general motive of criticism is ethical. He is almost without metaphysical passion, which may be the fundamental reason for F.H. Bradley's dislike of the religious writings, but his ethical passion is unmistakable. To Arnold metaphysical reasoning was simply methodical self-bewilderment, but he had as strongly as George Eliot the conviction that the moral law exists and speaks unequivocally in experience.⁽⁶⁾

然し乍ら、だからと言って、Arnold が critic よりもむしろ moralist であったと評することは必ずしも妥当とは言い得ないであろう。

次に、Arnold は政治思想の面では、民主主義の良き理解者であったが、この点に就いての深瀬基寛氏の所説は次の如くである。「アーノルドは中産階級の出身として、教養においてはオックスフォード大学の貴族的精神を満喫しながら、また生来の価値感覚と伝統にも拘わらず、デモクラシーと平等への傾向を単に政治的勢力として理解するに留まらず、実にそれをヨーロッパが野蠻時代を脱してこの方、人類を担う歴史的運命として把握し、現実の貴族階級に対する希望を誰よりも早く断念し、この人類の歴史的運命に即して、如何にして彼の価値感覚と伝統感覚を實現し得るかの道を教えるのである。現実の中産階級をば人類の歴史的運命の担当者として主張する——これこそ『自由主義』と呼ばれる十九世紀の英国の最大の思想傾向なのであるが、現在においてブルジョア意識と呼ばれ、アーノルドの用語で Philistinism と呼ばれる思想傾向こそ、その階級の出身者であるアーノルド自身によって貴族階級の思想的不感症にもまして排撃される当のものである。」⁽⁷⁾と。また、Arnold がこの世に生を享ける三十余年以前に、歐洲大陸で勃発した世界的な大事件であるフランス革命は、国際的視野に立って物事を考察する立場をとった Arnold の思想に少なからぬ影響を及ぼしたのであるが、彼がそれを如何に考えていたかに就いて、L. Trilling 氏の所説は次の如くである。

The French Revolution was not so much the fulfilment, Arnold believes, as the betrayal of the great ideas of France in the 18th century and failed because of the desire of men to give "an immediate and practical application to all these fine ideas of the reason."⁽⁸⁾〔注：Quotation Marks の中は *Essays in Criticism* からの引用〕

さて、以上の叙述は本論に入る前に Arnold の人物の一端を紹介して、本論への導入的役割を

果させたのであるが、今から Arnold の批評の現代的意義を検討することにしたい。その場合、批評に関する彼の名著である *Culture and Anarchy* と *Essays in Criticism* が中心となることを予め断っておかなければならない。その方法に就いては種々なものが考えられるが、本稿では Arnold の批評に関する諸論説の中で、とくに我々の注目を惹くものを適宜に選択抜萃して、それらが現代社会においてどのような意義を持つかを論述することにする。

先づ問題とすべきは、“The critical power is of lower rank than the creative.”⁽⁹⁾ という命題であろう。この彼の主張に就いては、既に数多くの識者の研究討議の対象となっているのであるが、現時点においても我々が熟読玩味し、沈思反省すべき内容を含んでいると言うべきであろう。巷間幾多の批評家が存在し、またたとえ本職の批評家たらずとも、批評家的態度や批評的言動をする者が何と多く見受けられることであろうか。しかも、それによって破壊的方向へ導くものは随所に見られるが、真に建設的な批評は比較的少いのが実情であろう。然し乍ら、批評が批評のための批評、論難し攻撃することのみを目的とした批評であってはならぬのは今更言を俟たぬところである。けれども、たとえ建設的批評であろうとも、創造活動よりは下位に在ると説いたのが他ならぬ Arnold その人なのである。彼は若い頃は詩作にその情熱を傾け只管詩人としての活躍に生き甲斐を見出していたのであるが、文部省督学官としての多忙な日常生活と、職務上見聞した社会の様相が彼をして批評家への道を辿らしめたようである。従って詩作という創造的活動より身を引くに到ったのは彼がとくに望んだ結果ではないと思われる。それ故にこそ、彼は創造力は批評力に優ることを常に念頭に置き、文芸・社会・文明の広範囲に亘って建設的、積極的批評活動を行うことによって、文学者、教育者、政治家は勿論、世人一般に自分達の欠点、短所を自覚させ反省させようと努めたのである。そしてそのことを通じて間接的に創造的活動に従事する人達の進歩、向上に貢献しようと考えたものと思われる。

次いで、我々が強い関心を持つべきものは、Arnold が述べた批評の能力の職務である。彼は次の通り論述している。

It is the business of the critical power, as I said in the words already quoted, in all branches of knowledge, theology, philosophy, history, art, science, to see the object as in itself it really is.⁽¹⁰⁾

彼が Hellenism の賛美者であったことは余りにも周知の事柄であるが、彼は Hellenism の特徴の一つを「物事をありのままに見る」ことにあると考えていたのであって、上に引用した一文の中にも、Hellenism の唱道者としての彼の思想の一端が如実にうかがわれるのである。彼が Hebraism の特色の一つを「良心の峻厳」(strictness of conscience) にあると見做したことは当を得たものと言うべきであり、Hebraism はユダヤ教やキリスト教の思想がその主流を形成しているが故に、Hebraism が中心思想となる社会にあっては、必然的にその宗教思想に拘束されざるを得ない。それ故に Hebraism 全盛の時代にあっては、物事を虚心胆懐に如実に見ることは必ずしも容易な業ではない。彼は Victoria 朝時代を Hebraism の隆昌の時代と考え、彼が身を以て体験した当時の社会の諸弊を Hebraism の持つ短所、欠点の所産と考え、その改革のために彼の所謂「優美と英知」(sweetness and light) の普及を力説したのである。そのためにこそ

彼は「意識の自発性」(spontaneity of consciousness) を特徴として持つ Hellenism という旗幟を高く掲げて、国民をして自由闊達に、あるがままに物事を直視させるように鋭意努力を惜しまなかったわけである。歴史的現実が如何なる様相を呈しようとも、“see things as they are” という心構え、姿勢は全ての人にとってこの上なく肝要なものである。この点でも、Arnold の所見は幾度も月移り星変った現代に於いても吾人が斉しく耳を傾けなければならない主張であろう。

ところで、Arnold は政治を思想で満す必要を説いている。彼は Edmund Burke を賞讃して、次の通り叙述したのである。

Burke is so great because, almost alone in England, he brings thought to bear upon politics, he saturates politics with thought.⁽¹¹⁾

彼は更に語を継いで、この文の内容を次の様に敷衍して説明している。

It is his characteristic that he so lived by ideas, and had such a source of them welling up within him, that he could float even an epoch of concentration and English Tory politics with them.⁽¹²⁾

Arnold が説いている如くに、政治に思想が漲っていることが必要であるのを何人も否定しないであろうが、問題はやはりその思想の内容如何ということになる。政治家がどのような思想、理想、理念を抱いているかは、その政治家に国政を委ねる国民にとって、その命運を大きく左右する重大事である。従って、苟も政治に携わる者は秀れた思想を涵養し、陶冶するべく常日頃から修練を怠ってはならないのであるが、Arnold は当時の英国には思想で満された政治を行うことのできる政治家が Burke 以外に殆んど皆無に近いのを指摘している。今翻って現代の世界に目を移すならば、とりわけ社会機構が弥が上にも複雑多岐化し、政治家の果すべき役割が益々重要性を増していることに鑑み、一人でも多くの政治家がより立派な思想を身につけることによって、政治が秀れた思想で満ち溢れることが、国民の安寧福祉の充実と向上をもたらす結果になるであろう。洋の東西、国の大小を問わず、凡ゆる国家の為政者はこの厳然たる事実を常に脳裡に浮べておくべきである。

さて、Arnold は「現代において批評が将来のために成果を挙げるためには、disinterestedness を所有しなければならぬ。」と説いている。この“disinterestedness” という語を、青木雄造氏は「成心をもたぬこと」と訳し、矢野峰人氏は「遊離的態度」と訳しておられるが、矢野峰人氏はその語の内容を次の如く説明しておられる。「“disinterestedness” とは、アーノルドによれば、批評が求知心の活動に従って、あらゆる対象の本質を知り、或は最善なるものを知らんと努力する時、そこに事物の実用的な見方の侵入することを斥け拒むことを意味するように思われる。」⁽¹³⁾ と。また、青木雄造氏の所説は次の通りである。「成心をもたぬとは何か。批評を政治的、実用的考慮から解放することである。なぜなら、批評とは対象の本質をあるがままに見ようとする知性の能力を行使すること自体のうちに喜びを見出す、精神の自由な活動にほかならないのだから。事実アーノルドがこのエッセイ三〇ページを費して、批評、創造、知性、思想、精神的ヨーロッパ協同体その他の高遠な題目を論じ、くりかえし、くりかえし説いていることは、この『成

心をもたぬこと』というひとことに要約される。実践的、党派の関心に滲透されていた当時のイギリスの批評を、文学批評本来の軌道にもどすためには、このいたましい努力が必要であった。⁽¹¹⁾と。

斯くの如き内容を具えた *disinterestedness* が批評にとって欠くべからざる要素であるとする Arnold の論説が全面的に妥当であるか、否かに関しては当然論議の余地が残されていると見るべきであろう。なんとすれば、ひとり文学批評のみに限らず、社会批評、文明批評など広く批評という範疇に包含される各分野に亘って、実用的考慮を全く無視して批評がなされるならば、その批評の現実的、实际的効用、効果を必ずしも期待できない場合が考えられるからである。然し乍ら、その反面において、余りにも徒らに実用的考慮ばかりに固執しては批評が面的となり一方に偏した性格を持ち、理想へ向っての飛躍が不可能となることも忘却してはならないであろう。この意味で、現代の批評家もまた Arnold の所説に耳を傾ける必要があるものと言える。なお、文学或いは文芸の批評の場合とはかくとして、社会批評、文明批評に関しては、政治的考慮を全く払わずになされるとき、果して適切な批評が行われ得るであろうか。この点甚だ疑わしいと言わなければならない。何故ならば、全ての人々が厳しい歴史的現実の中に置かれており、政治と無関係に生活を営むことは不可能なのであるから、批評はやはり政治的、歴史的立場を十分に勘案した上でなされるべきである。ただ、政治的考慮のみに止まるならば、やはり批評は現状のささやかな改善、改革を促すだけに留まり、高邁な理想、理念への飛躍に貢献することは困難となるであろう。

この “*disinterestedness*” についての記述と関連して、Arnold は文学批評の在り方について触れ、彼自身の批評の定義を、“a *disinterested* endeavour to learn and propagate the best that is known and thought in the world”⁽¹²⁾ と規定している。その彼の定義に就いても、適否に関して議論の余地が残されている。就中、“the best that is known and thought in the world” とは一体具体的に何であるか。さらには、それが「世の中で知られ考えられた最善のもの」であることを誰が判断するのか。批評家が自分で *best* だと考えればそれで済むのであれば、余りにも主観的に過ぎ、客観的妥当性を欠くことになりはしまいか。彼の所説の中でこれらの疑問に対して全ての識者を納得させるだけの論拠は見出しにくいようである。然し乍ら、この Arnold の批評の在り方についての定義は、批評家の常に念頭に置くべき努力目標を与えている点において、その大きな存在理由を持つものと思われる。ただ、その努力の際に批評家は *dogma* に陥らぬように心すべきであろう。要するに、彼の定義は批評の理念を幾分具体的に、適切に示したものであるとして、やはり現代的意義を具えていると評し得るものである。

さて、Arnold は *Essays in Criticism* 中の “The Function of Criticism at the Present Time” と題する章の最後を次の言葉で結んでいる。

The epochs of Aeschylus and Shakespeare make us feel their pre-eminence. In an epoch like these there is, no doubt, the true life of a literature; there is the promised land, toward which criticism can only beckon. That promised land it will not be ours to enter, and we shall die in the wilderness: but to have desired to enter it, to have saluted it from afar,

is already, perhaps, the best distinction among contemporaries; it will certainly be the best title to esteem with posterity.⁽¹⁰⁾

Arnold は「真の文学的生活」のある時代を卓抜せる時代と感じ、そこには「約束された国」があるとしている。だがしかし、彼は「批評はただそこへ人々を手招きすることができるに過ぎない。なんとなれば、我々はその約束された国に入らずして、荒野で死んでしまうであろうから。」と述べている。この一節には旧約聖書からの引用が含まれ、彼の思想には宗教的色彩が濃いことの一端が示されている。ところで、彼がここで述べた「約束の国」とは一体何であろうか。これに就いては種々の説が立てられ得ると思われるが、結局のところ、彼の所謂 culture が滲透し、sweetness and light が漲り溢れた社会を指すものと見て差支えないであろう。換言すれば、彼が心に描いた理想的な国家ということになる。彼は現実の社会の諸事象を具さに眺めるとき、その理想とは余りにも天地相隔っている状態を嘆いて、批評家の力を以てしては、到底彼の希望が達成されないことを痛感したのである。彼はその論文の掉尾を飾るべき最終の一文において、「然し乍ら、その国へ入ることを希望したこと、遙か遠い彼方よりその国に敬意を示したことが、既に多分現代人の中においての最高の荣誉であり、確かに後世の人達から尊敬を受けるための最高の資格なのであろう。」と述べている。この彼の所論は、一方では批評の力の限界を示しているが、他方では批評の任務、批評の真の在り方を示唆するものとして、現代においても、批評の立場を執る人々にとって少なからぬ意義を持つものと言えよう。

以上は、Arnold の批評精神、批評に対する態度、姿勢、および批評の根本理念といったものが、現代社会において有する意義について所懐の一端を披瀝したものである。そこで次に、彼の社会批評、文明批評の持つ現代的意義を検討してみることに致したい。その場合に、主たる対象とすべきものは、やはり彼の代表的な名著である *Culture and Anarchy* であることに格別問題はないであろうと思われる。Arnold は同書の中で、彼の時代の社会の無秩序の根源を教養の欠如に基づくと言ったのであるが、多田英次氏は同書の存在意義に関連して、次の如くその所見を叙述しておられる。「本書は十九世紀後半における英国資本主義社会の諸矛盾が当代の著名な『教養人』の目にどう映じたかの記念碑であるが、『不完全』をふくみつつ、『教養』が語られるとき、その出発点を示す古典となってきた。⁽¹⁷⁾」なお、多田氏は Arnold の欠点、短所として「中流階級に属すると自認する著者は、大衆に対して同情と信頼とを欠き、労働者階級を恐れた。にもかかわらず歴史はその反対に動いた。」⁽¹⁸⁾という点、および、「『教養——世界において考えられ語られた最善の知識』——を求めよと説く著者が当時すでに世に問われていた社会科学の諸文献に学ぼうとせず、『事物をあるがままに見る』ことを『教養』の出発点としてすすめる著者が中流階級の視界にさえぎられて国家の本質を見ぬけなかった。」⁽¹⁹⁾という点を挙げておられる。

さて、*Culture and Anarchy* の中で、Arnold が教養と宗教を比較して、次の通り述べていることに先づ注目してみよう。

Perfection—as culture from a thorough, disinterested study of human nature and human experience learns to conceive it—is a harmonious expansion of all the powers which make

the beauty and worth of human nature, and is not consistent with the over-development of any one power at the expense of the rest. Here culture goes beyond religion, as religion is generally conceived by us.⁽²⁰⁾

Arnold の思想は宗教と極めて深い関係を持ち、彼の思想は宗教を無視しては考えられないと評しても、あながち過言ではあるまいと考えられるほどである。彼は教養と宗教が同一の機能を持つ面があると見做して次の如く論じている。「人類が現在まで自己を完成しようとする衝動を表わそうとしてきた努力の中で最も大きく、最も重要なものである宗教——あの最も深刻な人間の経験の声である宗教——は、教養の偉大な目的である目的、我々をして完全とは如何なるものであるかを確かめ、これを普及させるという目的を命令し奨励するのみならず、人間的完全が何に存するかという問題を定めるに際して、教養の到達する結論と同じ結論に到達する。」⁽²¹⁾と。各自が人間的完成に到達し、人間としての完全さを具えようと努力することは、洋の東西、時代の新旧を問わず、この世に生を享けた者にとって何よりも肝要なものであることは今更言を俟たない。Arnold は “human perfection” の追求に当って果す役割は、教養によってと同じく、宗教によっても演じられていることを説いているのであるが、上に引用した英文の内容が示す如くに、彼は教養の領域が宗教のそれをのり越えていると考えている。この彼の見解については恐らく疑問の余地が残されているであろう。然し乍ら、宗教にとくに強い関心を抱き、その卓抜せる理解者であった Arnold が、なおかつ教養が宗教をのり越えていると断じたことに注目せねばならない。即ち、彼はそれほどまでに教養を重視し、それが果す役割に大きな期待を寄せていたのである。ただし、人間的完成をなし遂げるに際して、宗教もまた大きな影響力を持つことは勿論のことであり、Arnold もまたこの事実を十分に認識していたことは周知の通りである。

上述の通り、Arnold の culture の精神は「完全」の追求をその絶対的使命とするのであるが、その「完全」の本質的屬性は彼の所謂 “sweetness and light” に他ならない。それを他の英語で平易に表現すれば、beauty and wisdom とでも言い得る内容を、詩人らしい修辭的技巧を凝らして「優美と光明」という洗練された語を選んだことは、彼の類稀な手腕と評すべきであろう。

ところで、Arnold が宗教を論ずるとき、彼の宗教観は Hebraism と密接不離な関係にあることは周知の事柄であり、彼が考えていた Hebraism と Hellenism の内容を、石田憲次氏は「マシュー・アーノルドの宗教観」の中で次の如く論じておられる。「アーノルドは此の英国民が兎角実行の問題にかかづらっている傾向をヘブライズムと名をつけ、それに反対して自由に無私に考える傾向をヘレニズムと名づけた。そうしてその愛読する著者である Bishop Wilson の言葉を引いて、人間に二つの注意しなければならぬ事が有るとしている。“First, never go against the best light you have; secondly, take care that your light be not darkness.” (第一に、諸君が持つ最上の光に背いて進んではならぬ。第二に、諸君の光が闇でないように気を付けなければならぬ。) 此の第一の部分、即ち自分の持つ最上の光に背かずして進むと云うのがヘブライズムの精神である。第二の部分、自分の光と思うものが実は闇ではないか、を反省するのがヘレニズムの精神である。」⁽²²⁾と。なお、また、二大思潮と教養の関係に触れて、土居光知氏は次の如

く記されている。「アーノルドはヘブライ精神とギリシア精神の消長を考えて、何故に英国思潮が歐洲文化の中心から遠ざかり、狹隘に保守的になったかの原因を察し、再び広潤な精神を回復し、文化展開の本流に棹ささんとした。ここに彼のカルチュアの主張、批評主義の強調がある。」⁽²³⁾と。

さて、以上は Arnold の宗教観、二大思潮観の一端を紹介したものであるが、彼が宗教をのり越えているとまで考えた教養なるものの効用の一つとして、彼はそれが富を単に機械にすぎないことを認めさせることであると指摘し、次の様に叙述している。

The use of culture is that it helps us, by means of its spiritual standard of perfection, to regard wealth as but machinery, and not only to say as a matter of words that we regard as but machinery, but really to receive and feel that it is so. If it were not for this purging effect wrought upon our minds by culture, the whole world, the future as well as the present, would inevitably belong to the Philistines. The people who believe most that our greatness and welfare are proved by our becoming rich, and who most give their lives and thoughts to becoming rich, are just the very people whom we call Philistines.⁽²⁴⁾

すなわち、Arnold は教養の持つ効用の顕著なものの一つとして、それが「その完全の精神的基準によって、富を単に機械とみなし、口先で我々が富を機械とみなすと言うだけに止まらず、本当に富が機械であると認識し、実感することを助けるという点にある。」と述べ、更に言葉を継いで、「教養がかくの如き浄化作用的効果を与えてくれないならば、現在のみならず未来の全世界も不可避免的に俗物のものとなるであろう。」と喝破しているのである。正しく Arnold が指摘している通り、過去及び現在を通じて、富をこの世の至上のものと思い、全精力を富の獲得に捧げている人々が巷間随所に見受けられるのであるが、それらの人々は俗物の名に誠にふさわしいものと言うべきである。Arnold は教養を身につけることにより、富を機械とみなすことを通じて、我々が俗物に墮落することを防がなければならないと説いている。civilization が culture と共に手を携えて共に発展向上してこそ、真の人類の安寧福祉が増進されるものであることは今更言を俟たぬところである。近代世界における人類の不幸は civilization のみが長足の進歩を遂げ、culture の普及、向上がこれに伴わなかったことに最大の原因がある。物質文明の華かさに目を奪われて、精神文化の発展の重要性をおろそかにしたことが、延いては交通事故の激増と公害の拡大に繋がったものと言うことが可能なようである。この点に思いを馳せるならば、Arnold の所論は今日の視野に立っても深い意義を持つものと評すべきである。前川祐一氏は *Culture and Anarchy* が20世紀に至ってもなお世の中に影響力を及ぼしている理由を次の如く論じておられる。「彼は1869年に *Culture and Anarchy* を書き、それには『政治、社会に関する一つの批評』と、いかにもこれが社会的論文であるかのごとき副題がついていた。さらに同書中に登場し、あるいはアーノルドの批判を受け、あるいは彼の激しい指弾をこうむった当時の個々の識者の名前を列挙するだけでも、これがいかに論争的、時事的な論文であるかということは明白であろう。にもかかわらず、これが今日にしてなおアーノルドの主著の第一に数えられ、否定的、肯定的両面における影響力を20世紀に及ぼしているのは、一見一過性の時事論争に見える同書が、

実は著者の教養と文化に関する鋭い危機意識と永遠的な課題とに裏づけられているからである。」⁽²⁵⁾と。すなわち、Arnold は明確な問題意識を持ち、世相に対して予言者のな深い洞察を具えていたが故に、現代においても彼の論説はなお命脈を保ち、多くの批評家、文学者を初めとする各方面の識者に強い影響を及ぼしているのである。例えば、T.S. Eliot と Arnold の関係に就いて、西脇順三郎が記述された次のような一節がある。「彼 (Eliot) には本来ピュリタン思想があるがために、彼の主知主義には (論理的方面のほか) 宗教的道德面がある。このためにアーノルドに共鳴するのである。ギャロットの批評家としてのマシュー・アーノルドの論中に『エリオット氏が——あんなにモダンな彼が——アーノルドを読むのかと思うと面白い。』といているが、恐らく誰もそう思ったであろう。アーノルドは決してすばらしい文学批評家ではない。ギャロットによると彼は man of letters (文人) であってハズリットに劣るものであるといている。確かにそうである。アーノルドは結局文学の中に宗教的価値を入れ、宗教の中に文学的価値を入れた人である。換言すれば文学をもって世を教えたものである。」⁽²⁶⁾と。さらに、また、平井正穂氏は Eliot の *The Use of Poetry and the Use of Criticism* の内容紹介において、「アーノルドが詩を人生の批評として扱ったことにたいして、エリオットはそれを、宗教や道徳に対する浅薄さに由来すると同時に詩の詩たる機能を正当に認識し得なかったものとして批判する。アーノルドの文明批評にたいしても、低俗な意味でのモラリスト教師の発言にすぎなかったと批判する。」⁽²⁷⁾と記しておられる。斯くの如く T.S. Eliot によって批判を受けつつも、彼の関心を惹くことによって彼に対して影響力を及ぼしたことは、やはり Arnold の批評なり思想なりが、少なからぬ現代的意義を持つことを証明していると言っても差支えないであろう。なお、Arnold は深瀬基寛氏が「事実においてアーノルドの占めている歴史的定位というものは、ゲーテ以来最大の最も完全なヒューマニストである。」⁽²⁸⁾と述べておられる通り、彼の思想には humanism が脈々と波打っており、それが彼の詩や批評によく具現されている。そのことが、彼の批評家、詩人としての生命を今日まで持ちこたえさせた要因の一つであると思われる。

Bibliography

- (1) 世界大思想全集 (哲学, 文芸24) p. 352 ll. 1—6 河出書房新社
- (2) イギリス文学史 (斎藤勇著) p. 396 ll. 9—10 研究社
- (3) 同上 p. 398 ll. 15—18
- (4) 同上 p. 399 ll. 2—3
- (5) *A Comprehensive Study of the Criticism of Arnold and Eliot* (Daniel Cahill 著) p. 12 ll. 9—15 University Microfilms
- (6) *Matthew Arnold* (Kenneth Allott 著) p. 28 ll. 19—26 Longmans, Green & Co.
- (7) 批評の建設のために (深瀬基寛著) p. 12 ll. 2—11 南雲堂
- (8) *Matthew Arnold* (Lionel Trilling 著) p. 187 ll. 24—27 The Noonday Press
- (9) *Essays in Criticism* (Matthew Arnold 著) p. 11 l. 13 Oxford University Press

- (10) *ibid.* p. 12 ll. 24—27
- (11) *ibid.* p. 18 l. 3—5
- (12) *ibid.* p. 18 ll. 7—10
- (13) 近英文芸批評史（矢野峰人著）p. 123 l. 15—p. 124 l. 1 全国書房
- (14) 世界大思想全集（哲学、文芸 24）p. 356 l. 23—p. 357 l. 6
- (15) *Essays in Criticism*（Matthew Arnold 著）p. 34 ll. 34—36
- (16) *ibid.* p. 36 ll. 11—19
- (17) 教養と無秩序（多田英次訳）p. 290 ll. 11—13 岩波文庫
- (18) 同上 p. 289 ll. 12—13
- (19) 同上 p. 290 ll. 6—9
- (20) *Culture and Anarchy*（Matthew Arnold 著）p. 48 ll. 25—32 研究社
- (21) *ibid.* p. 47 ll. 14—27（一部省略）〔注：訳文については岩波文庫版「教養と無秩序」（多田英次訳）を参照した。（22）（24）も同様〕
- (22) 基督教的文学観（石田憲次著）p. 275 ll. 1—10 研究社
- (23) 文学序説（土居光知著）p. 330 ll. 15—17 岩波書店
- (24) *Culture and Anarchy*（Matthew Arnold 著）p. 51 l. 36—p. 52 l. 7 研究社
- (25) 講座英米文学史 12 批評・評論 I（前川祐一執筆）大修館
- (26) T. S. エリオット（西脇順三郎著）p. 25 l. 12—p. 26 l. 1 研究社〔注：(()) 内は筆者の挿入〕
- (27) 20世紀英米文学案内18：エリオット（平井正穂編）p. 162上半 ll. 13—18 研究社
- (28) 批評の建設のために（深瀬基寛著）p. 4 ll. 3—4 南雲堂